

大江親兵衛の初陣

はじめに

仁を根として、余の七行は、各節なり。然ば孝悌忠信も、又義も礼智も仁なければ、その徳聖に至りがたかり。

(第九輯卷之八)

右のごとく、『南総里見八犬伝』(以下『八犬伝』)では、仁義八行の中で「仁」が最も徳が高い。^①

本稿では、その重要な「仁」を司る大江親兵衛の初陣「館山城合戦」に、『三国志演義』「黄巾の乱」と、聖徳太子伝承「夷合戦」が利用されていることを指摘し、馬琴が如何にして親兵衛の「仁」を形成したのかを考察する。

三宅宏幸

一 「館山城合戦」と『三国志演義』「黄巾の乱」

『八犬伝』第九輯卷之四、蓼田素藤は諏訪の社で野宿した夜に、疫鬼と玉面嬢のやりとりを盗み聞く。原文を以下に示す。

^① 這樹の虚には神水あり、黄金を浸す事、一昼夜にして、這水を、病人に飲しなば、病著立地に瘥り果ん。……素藤は憶はずも、怪物の、うち相譚ひし、その事の趣を、現ともなく聞果て……
(病人に「稿者補」件の水を飲しにけり。……^②件の水を、受戴きて飲たるに、時を移さず快然と、心地清やかになりしかば、雀躍したる不勝の歎び、^③素藤を神として拜みて、感涙坐に找むを覚す。
(第九輯卷之四)

右のストーリー展開は、次の三点にまとめることができる。

①素藤が「黄金水」の作り方を聞き、生成して病人に与える。

②「黄金水」を病人が飲むと、病気が治る。

③人々は感謝し、素藤を伏し拝むようになる。

この場面に關する従来の研究はいくつかある。中でも麻生磯次「馬琴の讀本に及せる中国文學の影響」（『江戸文學と中国文學』三省堂、一九四六年五月）は、「源金太素藤が樹精と疫鬼の問答を聞き、疫病を救ふ話（第九十）は専ら搜神記（三）の趣向であるが、三国志演義の張角の面影をも加味したやうである」と、素藤と『三国志演義』の張角との關連を推測した。だが「黄巾の乱」との關連は他にも存在する。よつて麻生論文の推測は確定できると考える。

『三国志演義』で張角は、「黄巾の乱」の首領として物語序盤に登場する。その「黄巾の乱」を鎮圧するために、劉備・関羽・張飛は義兄弟の契りを結び、義勇軍を結成することになる。

「黄巾の乱」を起す前、張角は仙術を学び、その術をもつて人々の病を治癒する。毛宗崗評『三国志』を以下に引用する。

中平元年正月丙疫氣流行張角散施符水 為人治病自稱大賢良師
名號愈^③ 角有徒弟五百餘人
出愈奇

また江戸期に普及し、内容の理解しやすい『通俗三国志』（湖南文山著、元禄二年（一六八九）序）の該当箇所を記す。

其頃天下大いに疫癘行はれて、死する人多かりければ、張角普ねく符水を施すに、^②驗を得ずと云ふ者なく、^③盡く張角か座前に

來て、自ら其過を懺悔し、皆立どころに平復す（卷之一）

張角は「符水」で人々の病を治し、信頼を得る。水で病を治す点は、『八犬伝』における素藤の逸話と合致する。

馬琴の所蔵する『後漢書』「皇甫嵩伝」には、「張角……符水呪説して、以病を療む。病者頗る愈ゆ。百姓信向す」と、『三国志演義』と同じ記述が見える。^⑤加えて、三国志絵本『三国志画伝』（重田貞一訳、天保元年（一八三〇）刊）^⑥が、『八犬伝』第九輯刊行以前に出版されるのであるが、張角の口絵に「施符水治病」と見えることから、「符水」は女性や子どもといった読者層にも受容されたのではないか。

次に、『八犬伝』第九輯卷之六で、素藤が妙椿の妖術を使い、里見の御曹司義通を誘拐する話を取りあげる。里見の君主であり、義通の父義成は事の顛末を聞き、妖術破りの方法を述べる。

賊將臺田素藤は、必幻術あるものならん。それを折くには、^①獸血糞水韭大蒜などを、灑掛るに優ることなし（第九輯卷之六）

同様に第九輯卷之十一でも、里見の家臣荒川清澄が次のように言う。

那幻術を折くには、糞汁大蒜、獸の鮮血、汚穢れし物を濺ぎ掛るに、しくことなし、と漢籍に見えたり。（第九輯卷之十一）

さらに、里見方と素藤方の人質交換に際し、素藤は登桐と浦安を

里見に還す。だが実は二人とも人形であった。妙椿の妖術によつて、藁人形が二人に変じていたのである。その妖術が暴かれた箇所は、敵の使介の俱して来たりし、登桐主浦安主に……諺て葉碗を、とり落しつ、那人達に、濺ぎかけ候しに……変じて兩個の草偶兎に、なりてこそ候なれ

(第九輯卷之十一)

となつてゐる。以上のことから次の二点が確認できる。

①妖術を破るには、「獸血」、「藁水」、「葦大蒜」などの「汚穢れし物」を灌ぎかける点。

②妖術が敗れると、藁人形(草偶兎)になる点。

「黄巾の乱」で賊は妖術を使い、風雷を起し黒雲から人馬の兵を出す。劉備は朱雋と相談し、妖術破りを実行する。

朱雋計議曰^①彼用妖術我來日可宰猪羊狗血令軍士伏于山頭候賊趕來高坡上潑之其法可解……張寶作法風雷大作飛砂走石黑氣漫天滾滾人馬自天而下玄德撥馬便走張寶驅兵趕來將過山頭關張伏軍放起號砲^②穢物齊潑^③但見空中紙人草馬紛紛墜地風雷頓息砂石不飛

(卷之二)

また「通俗三国志」の本文には、

これ妖術なり、何ぞ怪むに足らん、明日^①羊猪の血を携へて、兵を山の頂に伏置き、賊の勢の追來る時、一度に酒ぎかけさせなば、此法必ず破べし玄德……次の日兵を進めければ……黒雲の

中より、人馬潮の湧が如くに討つて出でければ、玄德急に引退く、賊軍これを追つて、已に山そばの路を通る所に、一聲の鐵砲ひびき、五百の官軍ひとしく出でて、かの穢れたる者^①を酒ぎければ、忽ち空中より、或は紙にて造れる人形、草を束ねたる馬などと、紛々として地に落ち、風雷自ら息にける(卷之一)とある。妖術を破る術として、「猪羊狗」の「血」や、「穢れたる物」を灌ぐ点、妖術が破れると紙の人形・藁人形になる点が、「八犬伝」、「三国志演義」に共通する。

そして決定的なのは、「黄金水」で民の病を治し、村人の信頼を得る素藤の噂を聞いた小鞠谷如滿が、

民の惑ひを醒さずは、後漢の米賊張角が、妖孽にひとしき事あらん

(第九輯卷之四)

と言ひ、素藤を張角に等しい存在と評する。

以上のことから、素藤に張角が絡むことは明白であり、麻生論文の推測を確定できたと考える。

素藤に張角を絡めた馬琴の意図は何であろうか。ここで「館山城合戦」と「黄巾の乱」の粗筋を整理しておく。

「館山城合戦」の粗筋は、

①素藤が登場する。

②「黄金水」で疫病の人々を治癒する。

③素藤は人々の信頼を得て城主になるが悪政を布く。
④妙椿の妖術で里見を困惑させる。

⑤素藤は最終的に、親兵衛に捕らえられる。

となる。一方の「黄巾の乱」は、

①張角が登場する。

②「符水」で人々の病を治す。

③信者を得た張角は、黄巾賊首領となり天下を乱す。

④賊は妖術で官軍を悩ませる。

⑤最終的に黄巾賊は、劉備ら官軍に敗れる。

である。②、④が本稿で検証した箇所であるが、全体のストーリー展開が『八犬伝』と『三国志演義』と一致する。『三国志演義』はまず、張角が「黄巾の乱」を起すまでの経緯を描き、次に主要人物となる劉備・関羽・張飛の桃園の誓いを記す。張角が劉備らを登場させる起因となる。同様に『八犬伝』も、義通を誘拐するまでの素藤譚を先に書き、妙椿の妖術に苦慮する里見の救世主として親兵衛が登場させる。素藤が親兵衛を呼び起す形となっている。すなわち、劉備の初陣「黄巾の乱」の粗筋をなぞり、素藤に張角を重ねることで、間接的な形で親兵衛と劉備を関わらせている。

『通俗三国志』では、徐庶（単福）の台詞に、「本より君（劉備―稿者補）の仁心ある由を聞き及ぶ」とあり、『誹諧三国志』（草肥堂

序、宝永六年（二七〇九）刊^⑦）には、「劉備か仁孔明か智曹操か勇」と見える。劉備を「仁」君とすることが流布していたといえよう。

確実なのは、『大夷評判記』（三枝園批評、文政元年（一八一八）刊）の評に、「劉玄德が、江陵長阪の敗軍のごとく、民さへ城に逃げこもりて、仁君と存亡を、共にせんとするほどに」とあり、『八

犬伝』第九輯卷之五十一でも、「那照烈（劉備字玄德）は賢君なり

……其仁義忠信に及ぶ者なし」とすることから、馬琴は劉備を

「仁」君と認識していた。

つまり馬琴は、親兵衛に劉備の代名詞「仁」を付すため、劉備の

初陣相手張角を、親兵衛の初陣相手素藤に重ねたのではないか。

一一 「館山城合戦」と聖徳太子伝承「夷合戦」

次に聖徳太子伝承との関連を述べる。従来の研究では、湯浅佳子

『南総里見八犬伝』と聖徳太子伝（『近世文藝』七十一号、二〇〇

〇年一月）が、掌に器物を持つて誕生する奇譚の一致や、親兵衛が

神薬を用いて不殺生を徹底する点をあげ、親兵衛と太子伝承との関

連を指摘する。

また信多純一「富士山の本地」と『八犬伝』（『馬琴の大夢里見

八犬伝の世界』岩波書店、二〇〇四年九月）も、母親が靈験あらた

かなものを飲み込む点をあげ、親兵衛と太子の関連を述べる。

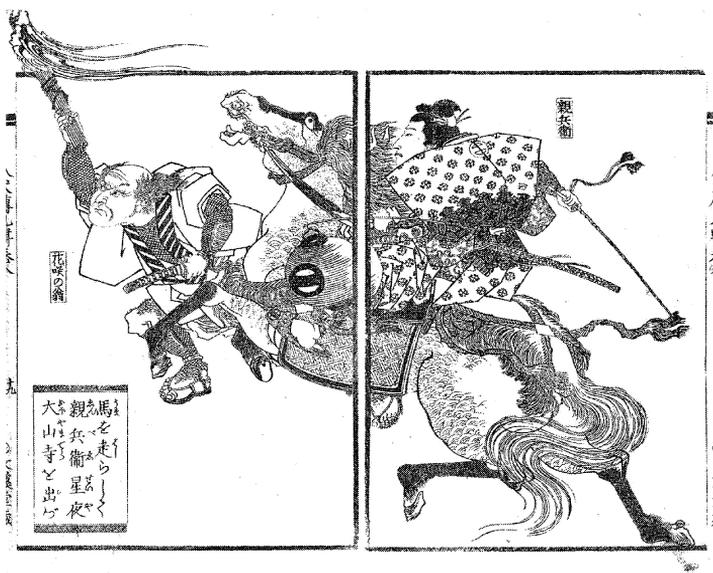


図1 『南総里見八犬伝』第九輯卷之八（十八ウ・十九オ）
（関西大学図書館所蔵）

親兵衛と太子とが一致する特徴の中で、湯浅論文、信多論文がともに指摘するのは、太子の黒駒伝承である。太子は二十七歳のとき、甲斐の国より名馬黒駒を献上される。信多論文はこの伝承を踏まえ、親兵衛の二頭の愛馬青海波・走帆と、黒駒との共通点をあげる。そして「親兵衛と二正の神馬に絡む展開は、聖徳太子と黒駒伝承と照応している」と結論づける。

信多論文が取りあげている箇所を見る。『八犬伝』第九輯卷之八、館山城に赴く親兵衛に、義実は名馬青海波を与える。青海波の様子は以下のごとくである（図1）。

現その形勢、凡庸ならず。毛色は、蒼と白を雜えて、鱗の像く波に似たり。……這馬、高七尺有余、骨法右の趣に、及ざる者ありといへども、龍と驪の間たり。（第九輯卷之八）

信多論文は右の青海波を、寛文六年（一六六六）刊『聖徳太子伝』に出てくる、黒駒（図2）と関連づけて説明する⁹⁾。

この馬は本信濃国の井上の牧に四の脚しろき黒駒ありけるに天竜そのうへに落か、りて則この黒駒をばうめり……此黒駒は神力自在の竜馬なり。（卷六「廿七歳 甲斐黒駒之事」）

しかし、ここに二つの問題がある。一つ目は、黒駒の黒い毛色に對して青海波は白が基調の青い波模様である。図1の青海波と図2の黒駒の挿絵を比べても、明らかに毛色が異なる。『八犬伝』のも



図3 『太子かいてふ記』(十才)
(東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵)



図2 『聖徳太子伝』卷六(四十四才)
(同志社大学図書館所蔵)

う一頭の神馬走帆は四の脚が白い。走帆と黒駒の毛色が共通するだけに、白葦毛の青海波の典拠として黒駒では合わない。

二つ目は、図1と図2を比べると、親兵衛と太子の装束が異なることである。図2は、太子が諸国の伽藍を詣で富士に至る場面であり、図1は親兵衛が館山城へ戦關に赴く場面である。合戦の典拠が、太子の「巡礼」伝承でよいか。典拠としてより適切なものを指摘すべきであろう。

では、青海波の「白」い毛色は何に拠ったのか。ここで聖徳太子伝承「夷合戦」をあげる。「夷合戦」は、太子が十歳のときに日本侵略を企む蝦夷の夷を、神通力を發揮して退ける伝承である。

『聖徳太子伝』卷一、太子は数千万の夷が集結する城に向かう。

太子た、御一人しろき御馬にめしてえびすが城へうちむかはせ給ひけるわざと御ともの人をばめしくせられずた、蘇我の大臣はかり御ともつかうまつるなり

(卷二「十歳 千島夷合戦之事」)

太子は「しろき御馬」に乗り、供を一人連れる。亦本『聖徳太子』(近藤清春画、刊行年不明)は「夷合戦」の場面を、「夷、日本へ攻め来たる。太子白馬に乗り、大勢の夷の中へ乗り込み、馬にて山を崩し、岩を蹴立ててついに夷を平らげ給う」とする。図3の赤本『太子かいてふ記』(鳥居清経画、刊行年不明)も、太子が白馬



図4 『聖徳太子伝』巻二（三十四オ）
（同志社大学図書館所蔵）

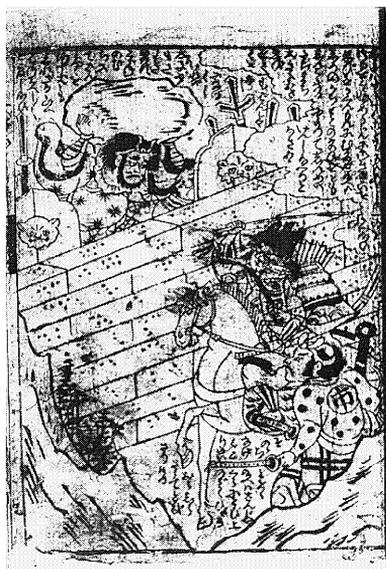


図5 『太子かいてふ記』（九オ）
（東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵）

に跨り夷たちと戦う様子を描く。

つまり「白馬」は、「夷合戦」伝承の特徴の一つといえる。

さらに「夷合戦」における太子は、強力な道具、黄金の「鞭」を持つ。夷は太子との戦いの中で、岩を城の上から投げつけようとする（図4）。太子は「鞭」を振り上げ、岩を受け止め跳ね返す。『聖

徳太子伝』は次のように記す。

太子……めさる、所の御馬に金のぶちをあて給ひければ御馬たちまちにこくうにあかり……あらえびすともばんじやくをいだきてはるかにたかき峰より太子になげかけたてまつり侍れば太子……金の御むちにうちあはせたかさ一丈はかり七度まで上た

まひ

（巻二「十歳 千鳥夷合戦之事」）

図3の赤本『太子かいてふ記』は、「こがねのむちにてばんじやくをはねとばし」と書き、図5でも太子は右手で鞭をふりあげている。黒本『聖徳太子』（著者不明、明和八年（一七七二）刊）は、敵が投げた岩を鞭で受ける太子の様子を描写する^①。

すなわち、「白馬」と「鞭」は「夷合戦」における太子の特徴と認めることができる。

改めて、親兵衛の挿絵（図1）を確認する。

①白茸毛の馬に乗る。

②供に与四郎一人を連れる。

③右手に鞭を持つ。

といった親兵衛の様相である。「夷合戦」伝承の、

①白馬に跨り、

②蘇我大臣一人を供とし、

③鞭を右手に持つ、

太子の様相と合致する。先に問題とした装束の相違も、「合戦」という場面設定が共通することで説明がつく。

そればかりではない。「館山城合戦」では、親兵衛の口から「聖徳太子」の名が出る。『八犬伝』第九輯卷之八、館山城に到着した親兵衛は、国使として素藤との対面を請う。

目今寄隊の使者と称て、額髪ある猴子〔俚語に人の親たるもの其子をセガレといふ。セガレは拙郎のよしなり。そを又転じて後生を罵てセガレといふこと近世の軍記に見えたり。余も皆これに倣ひつ〕一名……対面を請ふといへり。（第九輯卷之八）
素藤方は親兵衛に対し「額髪ある猴子」と、若者を罵る言葉を使う。一方『聖徳太子伝』で、城に着いた太子を見た夷は、

「いま十歳はかりにして幼稚不肖なりいやくしくおもひたてまつり侍りけるこれほと幼少なる小童たとひ聖人たりといふとも何事かあらん」（巻一「十歳 千島夷合戦之事」）

と言う。たとえ聖人であっても、僅か十歳ばかりの少年など恐るる

に足らずと夷は太子を見くびる。城の前で少年という理由から侮られる点で、親兵衛と太子は一致する。そのとき親兵衛は、

古の、賢しき人の例を思ふに、……厩戸の皇子〔聖徳太子〕のごときは、生ながらの聖にて、聡明睿智備稀なり。

（第九輯卷之八）

と言り返す。聖徳太子を生まれながらの聖とし、太子の神童性を強調する。わずか九歳で単身館山城に乗り込み、素藤を捕らえる親兵衛もまた神童である。信多論文は右の原文を、「富山を名馬にて下り、赴く所の問答で聖徳太子名を記す」と、『八犬伝』における富山が富士山と見立てられていることを踏まえ、「黒駒」伝承と関連づける。しかし、これまであげてきたことを見ると、「夷合戦」伝承が利用されていると解釈するほうが自然であろう。

ここで一体の木像を示す。松韻寺（愛知県安城市）には、江戸期に製作されたとする木造太子乗馬像が所蔵される。稿者が実見したところ、残念ながら銘が彫られておらず、制作年等も確定できなかった（図6）。だが、太子が白馬に跨り、右手に鞭を持ち、口取りが一人いるこの像は、親兵衛が白筆毛の青海波に跨り、右手に鞭を持ち、口取りに一人連れる形象と合致する。稿者は馬琴がこの太子像を実際に見た、と考えるわけではない。ただ、「夷合戦」の太子の形象は絵本や伝承、信仰によって流布していたとみなしてよいの



図6 松韻寺蔵 木造太子乗馬像
(稿者撮影)

ではないか。何より「館山城合戦」時の親兵衛は九歳、「夷合戦」時の太子は十歳で二人の年齢は近く、親兵衛は「館山城合戦」が、太子は「夷合戦」がそれぞれの初陣なのである。親兵衛は早熟の少年大士で神童性があり、聖徳太子もまた少年武神として、夷と戦い神童ぶりを發揮する。「八犬伝」の読者となる人々の意識には、白馬に跨り、鞭を振り上げ夷と戦う十歳の少年、聖徳太子の姿が存在した。馬琴は「館山城合戦」の親兵衛に、「夷合戦」における太子の形象を用いることで、太子の人物像を親兵衛に重ねたのである。

三 「夷合戦」不殺生の「仁」

では親兵衛の典拠に「夷合戦」の太子像を用いたとするならば、太子の人物像とはいかなるものか。まず「八犬伝」の親兵衛の人物像を見る。「仁」の霊玉を持つ親兵衛が不殺生を徹底することについては、従来論考が数多い。が、神業を以て死んだ人を生き返らせる、といった親兵衛の特異性ゆえに、対管領戦に集中する。しかし親兵衛は「館山城合戦」でも、不殺生を実践する。

『八犬伝』第九輯卷之九、里見家では素藤の処罰について詮議が開かれる。

辰相は、義成主に稟すやう、「素藤們を誅罰の事、稲村へ牽すべきや、^①這里にて梟首せしめんや。願ふははやく天罰を、示して後の兇奸を、懲し給ひね。」と請まつるを、^②義成聞つ、領きて、「その義も亦親兵衛が、思ふ旨こそあらんずらめ。仁は執を佳とするや。」と問れて親兵衛膝を找めて「……願ふは我君^③格別の、仁政を施して、他們が頭顱を接し給へ。……恚れば今素藤們を、饒して追放し給ふとも、又何ばかりの事をせん。非如今威頭顱を斬鼻給ふとも、当家の政事仁義に違ひて、武徳衰へ給ふことあらば、奸民必武を接て、叛くもの多からん。願ふは仁恕のおん計ひこそ、あらまほしく候なれ……義成主は、

「六郎が意もその理あり。我も如右こそ思ひしに、親兵衛が論弁は、又一級の上に在り。残に克殺を去り、寇に報ふに徳をもてせば、我後いよ／＼長久ならん。現素藤は……国賊にあらざれば、法度を緩めて追放つとも、誰か亦これを非とせん」

(第九輯卷之九)

詮議のポイントは、以下の四点である。

①辰相は素藤の処刑を進言する。

②義成が親兵衛に考えを尋ねる。

③親兵衛は、素藤を赦して追放処分にするよう進言する。

④義成は親兵衛の意見を採用し、素藤を追放処分に処す。

親兵衛は、素藤の「頭顱を斬臬」ることが里見家の「仁義に違」う行為であるとし、素藤助命を意見する。ここに「館山城合戦」における親兵衛の「仁」が表現されているといえよう。

馬琴が所蔵する『聖徳太子伝暦』（延喜十七年〔九一七〕成立）

上巻、太子十歳の項で、敏達天皇は攻めよせた蝦夷への対応について群臣と協議する。なお、傍線に付した算用数字は、『八犬伝』のポイントと対応する。

蝦夷数千、(於) 辺境ニ寇ス。天皇、群臣ヲ召シテ、征討ノ(之) 事ヲ議ル。時に於て太子、側ニ侍テ、耳ヲ竦テ、左右ニ、群臣ノ論ウヲ聞キタマフ。天皇、近ク太子ヲ召シテ詔シテ曰ク、

大江親兵衛の初陣

「汝ガ意ニ如何。」太子奏シテ曰サク、「……今、群臣ノ議ル所ハ、皆衆生ヲ滅ス(之) 事也。児ガ意ニ以ヘラク先ヅ魁帥ヲ召シテ、魁帥者、大重(加) 教諭ヲ加ヘテ、其ノ重キ盟ヲ取テ、毛人也放シテ本洛ニ還シテ、加重祿ヲ賜テ、其ノ貪性ヲ奪ヒタマヘト為ヘリ。」^①天皇大ニ悦テ……

(上巻)

群臣は夷の処刑を意見するが、太子は殺生を避け、本国に帰す旨を進言する。天皇は太子の意見を採用する。

すなわち、辰相〔群臣〕は謀叛者の処刑を意見するが、義成〔天皇〕が親兵衛〔聖徳太子〕に考えを聞くと、徳を以て追放する〔本国に帰す〕よう進言する展開は、『八犬伝』、『聖徳太子伝暦』と合致している。

重要なのは、親兵衛も太子も殺生を好んでいないことである。親兵衛は、賊を許して首を繋げる不殺生が「仁恕」の行いであると言ふ。聖徳太子もまた、夷を処刑することに反対する。

親兵衛は第九輯卷之七で、

今より勉めて殺生を、好まで忠恕惻隱を、心とせば事足りてん。……只当前の敵を撃て、降るを殺さず、走るを捨て、人を征するに徳をもてせば、則忠恕の義に称ふて、仁といふ名に羞ざるべし。

(第九輯卷之七)

と述べる。この台詞は「館山城合戦」に赴く前に語られるのだが、

親兵衛は「殺生を、好まず」、「降るを殺さず」と述べたとおり、「館山城合戦」で一人も殺すことはなかった。対管領戦より以前の初陣で、親兵衛の不殺生の「仁」はすでに行われていた。

『聖徳太子伝暦』の、敏達天皇七年、推古天皇十九年の項には、
此ノ日ハ梵天、帝釈、降ツテ国ノ政ヲ見ハス。故ニ殺生ヲ禁ジ
タマヘリ。是レ仁之基也。仁ト聖与ハ其ノ心近シ (上巻)
釈氏の五戒には、一に不殺生、外典の仁也。 (下巻)

と、殺生を禁ずることを「仁」の基本とする記述が見える。『聖徳太子伝暦』を閲読した馬琴が、親兵衛の「仁」を形成するにあたって、太子が不殺生を「仁」とする記述や、『夷合戦』後の詮議の展開を参照したことは確定できる。

つまり、太子が「夷合戦」時に行った不殺生の「仁」行を、親兵衛が「館山城合戦」で同様に実践することにより、親兵衛に太子の「仁」性が重なり、仁の名に差じぬ「仁」が形成されるのである。

まとめ

以上、『八丈伝』の「館山城合戦」は、『三国志演義』「黄巾の乱」と、聖徳太子伝承「夷合戦」に拠るといえる。馬琴は「館山城合戦」の親兵衛を、中国の「仁」君劉備と、聖徳太子を使い表現した。馬琴はまず、劉備の初陣「黄巾の乱」の敵張角（黄巾賊）の様相、

すなわち「符水」や「妖術」を、親兵衛の初陣相手である素藤・妙椿に付すことで、間接的に劉備の「仁」を親兵衛に重ねた。さらに「夷合戦」伝承における太子の、白馬に跨り、十歳で夷を退治する神童性、不殺生の「仁」性を、九歳の親兵衛に与えた。

馬琴は、親兵衛の初陣を描くにあたり、劉備の初陣「黄巾の乱」と聖徳太子の初陣「夷合戦」伝承を、単独ではなく重層的に利用することで、劉備と聖徳太子の「仁」を親兵衛に賦与したのではないか。

注

- ① 『南総里見八丈伝』（小池藤五郎校訂、岩波書店、一九八四年十一月—一九八五年八月）による。ただし振り仮名は外した。以下の引用も基本的に同様である。
- ② 濱田啓介「八丈伝依拠小攷」（『説本研究』第一輯、一九八七年四月）。播本真一「『南総里見八丈伝』の神々—素藤・妙椿譚をめぐって—」（『国語と国文学』第七十三巻五号、一九九六年五月、板坂則子編『馬琴』若草書房、二〇〇〇年三月所収）。
- ③ 崔香蘭・胡立琴「中国神魔小説の馬琴長編読本への影響」（『語文』第百二十七輯、二〇〇七年三月）。
- ④ 『四大奇書第一種』（同志社大学図書館所蔵本）による。
- ⑤ 徳田武編『三国志』（ゆまに書房、一九八四年一月）による。
- ⑥ 長澤規矩也『後漢書』（汲古書院、一九七二年二月）による。私的に書き下し文に改めた。

- ⑥ 国立国会図書館所蔵本による。
- ⑦ 鈴木勝忠編『雑俳集成 私家版3期8』（一九九七年十月）による。
- ⑧ 中野三敏編『江戸名物評判記集成』（岩波書店、一九八七年六月）による。
- ⑨ 同志社大学図書館所蔵本による。
- ⑩ 鈴木重三・木村八重子『近世子どもの絵本集江戸篇』（岩波書店、一九八五年七月）による。
- ⑪ 湯浅佳子「『翻・複』黒本『聖徳太子』について」（『叢』第十九号、一九九七年六月）に図が掲載されている。参照されたい。
- ⑫ 濱田啓介「八丈伝の構想に於ける対管領戦の意義」（『国語国文』第二三巻十号、一九五四年十月、『近世小説・宮為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年十二月所収）。
- 前田愛「『八丈伝』の世界」（『文学』第三十七巻十二号、一九六九年十二月）。
- 野口雄彦「『仁』の千年王国―『八丈伝』の対管領大戦争をめぐって―」（『日本語学』第九巻四号、一九九〇年四月、『江戸と悪』『八丈伝』と馬琴の世界』角川書店、一九九二年二月所収）。
- ⑬ 服部仁「馬琴所蔵本日録（一）―翻刻『著作堂俳書目録』並に『曲亭蔵書目録』」（『同朋大学論叢』第四十号、一九七九年六月、『馬琴研究資料集成 第五巻』クレス出版、二〇〇七年六月所収）及び、日本随筆大成編輯部『日本随筆大成（第一期）5』（吉川弘文館、一九七五年六月）による。
- ⑭ 日中文化交流史研究会編『東大寺図書館蔵『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、一九八五年十二月）による。

〔付記〕 本稿は、平成十九年度日本近世文学会春季大会での口頭発表に基

づく。発表後、御教示を賜りました諸先生方に、末筆ながら御礼申しあげます。

また、資料の掲載をお許しいただいた東京都立中央図書館東京誌料文庫、関西大学図書館に対し、深謝いたします。